

MfG_J_Hirasawa_kumaichi_and_Mitsuke

(C) 春日正利

1. 平澤熊一の「南苑」
2. 春日のガイドポイント
3. 平澤熊一年譜 (1908-1989)
4. 「見附織物工業協同組合」が2023年3月に解散

参考

長岡現代美術館と斎藤義重、「大智浄光」
平澤熊一との関わり
見附ギャラリー バンフレット
2019_没後30年 平澤熊一・若井宣雄展チラシ

1. 平澤熊一の「南苑」

見附ギャラリー バンフレットより

熊一は1908(明治41)年、新潟県古志郡上組村大字撰田屋(現・長岡市)生まれ。1927(昭和2)年、工学院建築科を卒業。

(1887設立の工手学校、現・工学院大学)

1928(昭和3)年、川端画学校洋画

科で学ぶ。1940(昭和15)年、美術文化第1回展(東京府)に「夢」「岩」が

入選。1943(昭和18)年、第4回美術文化展で「故宮ノ花」「南苑」「白閑鳥」が奨励賞受賞。1954(昭和29)年、第18回自由美術展で「夏休みと少年」が佳作賞受賞。1955(昭和30)年、自由美術協会会員となる。1989年12月4日逝去。享年81。



「孔雀」をモチーフとした油絵
《南苑》1943 F120 (130×194cm)

東京池袋から長岡疎開時代

北京から帰国後結婚し阿佐ヶ谷に新居を構えそこで長女が生まれる。後1943年東京豊島区池袋の要町(アトリエ村)にアトリエ付き長屋を借りる(長男誕生)。この頃の作品の多くは紛失してしまったが、2015年に見附市公民館にて120号の大作『南苑』が発見された。この作品は美術文化協会主催の第4回美術文化展に出展され、奨励賞を受賞した作品であり、この時代の作品としては小品を除けば現存する唯一の作品となる。この時代多くの画家がシュールリアリズム表現の傾向が強く平澤も同じくその傾向の作品を手掛けていた。

1945年の4月、池袋から郷里の新潟県長岡市に疎開している(1978年次男誕生)。そのころの作品は大作はなく公募展もなかったようである。作品は小さいながらも穏やかな作品が多いが、ジャンルの的にはさまざまな作品を手掛けている。(1940年9月29日の日記から:自分は近ごろ花だけを描いている。花だけに感激を求めているのだ。小さい花にも感激できる心を持ちたいものだ。ここから美術文化協会なる1939年設立の前衛芸術家の団体である。独立美術協会、新造型美術協会、創紀美術協会、新日本洋画協会、ナゴヤアバンガルドクラブ、二科九室会などのシュルレアリスムを志向する前衛作家が集結し、銀座アラスカにて発会式が行われた。創立同人41名には、鬚光、斎藤義重の名がある。

草むら 1960年代



2. 春日のガイドポイント

平澤熊一は、父親、そして兄が大工で、サフラン酒の離れを作るほどの家に生まれながら、たまたま家業の建築を学ぶ途中で絵への情熱捨てがたく、勘当されても絵描きを続けました。熊一とサフラン酒と、こんな縁のつながりがあるなんて、知りませんでした。

戦前の作品が東京大空襲で全て火災で失われ、「南苑」は、きっと摂田屋にあって、奇跡的に難を逃れたのと思われまます。

貧乏に苦勞し、栃木にアトリエ付きの一軒家を贖うために、自身の代表作とも云うべき大作「南苑」を手放すことにし、たまたま長岡の町が空襲で長岡の商家に余裕がない時、隣り町見附の織物協同組合が買い取ってくれ、最終的に見附市の所蔵美術品として、今日に至り、私らが、この大作を見ることができる。これも、ひとつのドラマです。

見附からのゲストには、ぜひお話したいストーリーです。

また平澤熊一の活動場所は「美術文化協会」という、戦中にいくつかの美術団体が統合した前衛画家集団でした。この設立メンバーに、近代日本前衛芸術の先駆者として知られ、後に長岡現代美術館の前庭と壁面レリーフ「大智浄光」を設計製作し、公開審査の長岡現代美術館賞展審査員を務めるなど、現代美術館と深く関わった斎藤義重さんの名があることを知り、驚きました。

熊一をシュールリアリズムの一人という人もいるようです。

その方向の絵を見たかったです。

日本で最初の建築科で学び、前衛芸術家集団の「美術文化協会」で何度も奨励賞を受賞するなど、前半生は華やかな芸術家としての道を歩みました。その生涯の大作が、いろいろな経緯で、今、見附にある。

また、疎開期には、長岡などの画家や文化人との交流も盛んにあったらしい。

以下、MySkip ギャラリーみつけ学芸員 小沼智恵利

長岡出身画家・平澤熊一の代表作発見 より引用

長岡の同じ村出身の童画家川上四郎や小説家で夏目漱石の娘婿の松岡譲。文展や帝展で活躍し不同舎で小山正太郎から学んだ画家高村真夫。1950年に宇都宮に移転し自宅建築の際に行った作品頒布会では三人からの賛辞が芳名録に残っています。

ゲストがアートファンであることに気づいたら、教えてあげたい「うんちく」です。

3. 平澤熊一年譜 (1908-1989)

- 1908年(明治41)現在の長岡市摂田屋に生まれる。
- 1927年(昭和2)建築士を志して入学した工手学校(現在の工学院大学)を卒業するが、在学中に絵画に興味を抱き川端画学校で洋画を学ぶ。
- 1933年(昭和8)台湾に渡り、4年間滞在して制作に専念し、1936年には同地で個展を開催した。
- 1937年(昭和12)帰国。東京・豊島区に住み、麻生三郎、井上長三郎ら新人画会のメンバーと交流する。
- 1938年(昭和13)中国北京に写生旅行。第8回独立美術協会展に《月と貝》が初入選する。
- 1940年(昭和15)東京・阿佐ヶ谷に移る。第1回美術文化協会展に入選。
- 1943年(昭和18)第4回美術文化協会展に《南苑》などを出品し、奨励賞を受ける。
- 1944年(昭和19)東京・池袋付近に広がっていたアトリエ長屋の1つすずめが丘(要町1-13)に移る。
- 1945年(昭和20)空襲を避け5月頃、長岡に疎開する。
- 1950年(昭和25)妻の実家のある宇都宮に移り、市内一の沢2丁目に自身設計したアトリエ付住宅を建設する。ここで絵画研究所を主宰し生徒を指導する。このころ「南苑」制作か。
- 1951年(昭和26)この年の第15回展から自由美術協会展に出品を始める。以後、1981年の第45回展までほぼ毎年出品を続ける。
- 1955年(昭和30)第17回自由美術協会展に出品、自由美術協会会員になる。
- 1971年(昭和46)画集『平澤熊一画集 台湾1933-1937』を刊行。
- 1973年(昭和48)「栃木県内美術の現況展」(栃木県立美術館)に出品。
- 1977年(昭和52)「栃木県美術の現況展」(栃木県立美術館)に出品。
- 1984年(昭和59)「栃木県美術の現在 絵画／映像／彫刻」(栃木県立美術館)出品。
- 1989年(平成元)12月4日死去。享年81歳。
- 1990年(平成2)「鬼の業 平澤熊一遺作展」(宇都宮市文化会館)開催される。
- 2012年(平成24)練馬区立美術館で特集展示「平澤熊一展—うちのめされた時がほんとうに人生をしっかりと生きるとき」開催される。
- 2015年(平成27)栃木県立美術館で企画展「昭和を生きた画家 平澤熊一展」開催される。
- 2018年(平成30)みつけ市民ギャラリー(ギャラリーみつけ)展示室2にて「見附市所蔵《南苑》公開」開催される。
- 2019年(令和元)みつけ市民ギャラリー「没後30年平澤熊一・若井宣雄展」が開催される。

4. 「見附織物工業協同組合」が2023年3月に解散

1950年、平澤熊一が宇都宮宮にアトリエ付きの一軒家の新居を建設の費用捻出のため、疎開中だった長岡で「南苑」を手放すことにした。戦後5年、長岡の町が空襲で長岡の商家に余裕がない時であったため、隣り町見附の織物協同組合が買い取ってくれた。

見附織物組合23年3月に解散

2021/5/14 加盟社減少、苦渋の決断

新潟県見附市で繊維産業の発展を担ってきた「見附織物工業協同組合」(本町1)が2023年3月に解散する。1960年代には120社以上が名を連ね、販売総額もピークの84年には220億円に達した。ただ輸入品に押されるなどして徐々に低迷。加盟社も減り、運営が難しくなったことから、前身を含め140年余りの歴史に幕を下ろす。今後は柄織りなどの得意技術を生かし、各企業で連携して産地をPRしていく。

織物組合の前身は、製品の粗製乱造を防ぐために1881(明治14)年に結成した「正紺組(しょうこんぐみ)」。その後、数度の合併や改組を経て、1950(昭和25)年に現在の織物組合となった。

見附の織物は、綿や麻の糸を染めてから布にする「先染め」が主力で、製品を染める「後染め」も手掛けてきた。高級衣類に使われ、最も多かった65年には125社が加盟し、組合で会合を開くと会場に人が入りきらないほどだった。

しかし、オイルショックによって輸出が打撃を受け、加盟社の廃業や倒産が相次いだ。商社が展開する他地域の大規模工場や安価な輸入品にも押され、販売量が落ち込み、90年の加盟は35社にまで減った。

企業の整理や業界再編も進み、2018年には会員が5社に。販売や輸出などを合同で手掛けるメリットが乏しくなり、18年の総会で23年解散を決めた。

組合の丸山登理事長(72)＝丸悦機業社長＝は「先輩たちが引き継いできた組合を解散することは申し訳ない」と吐露する。一方、見附の織物は綿と化学繊維の組み合わせが特長で、高品質を維持しているとして「悲観はしていない」とも強調する。

各社は立体感のある「ジャガード織り」やさまざまな柄を組み合わせる「ドビー織り」をはじめ、得意分野を生かした製品を出し、活路を探っている。丸山さんは「企業同士でさらに切磋琢磨(せつさたくま)していく。ここから新たなスタートにしたい」と語っている。

参考 長岡現代美術館と斎藤義重、「大智浄光」

1. 長岡現代美術館

1964(昭和39)年8月1日、現在の長岡市坂之上町の地に開館。1979年に閉館。「現代美術」を名乗った日本初の美術館。公開審査を行なう長岡現代美術館賞を設け、1968年まで5回にわたり実施している。

同賞には、出品作のうち1作家1点を購入するという画期的なシステムがあった。現在長岡商工会議所となっているビル(旧長岡文化会館)の1階が当美術館。1983年まで開館していた。

ビルの外壁装飾レリーフ、前庭の設計が斎藤義重作

2. 斎藤 義重(さいとう よししげ、1904年5月4日 ~2001年6月13日)

青森県弘前出身の現代美術家。多摩美大、東京芸大教授。二科会の九室会や美術文化協会の創立メンバーであり、日本の戦後美術の偉大な前衛作家として知られています。長岡現代美術館の壁面レリーフと前庭を製作。



壁面レリーフ「大智浄光」と前庭

3. 「大智浄光」と、その後

(1) その一

長岡市中心部にあった長岡現代美術館のシンボル、巨大な銅製のレリーフ「大智浄光」という作品名の由来についてです。

正信念佛偈という、浄土真宗の開祖・親鸞上人が著した主著「顕浄土真実教行証文類」、略して「教行信証」の中の偈文で、浄土真宗の門信徒にとって、最もなじみ深い経文があります。正信念佛偈をただ読んだだけでは「浄光」の語句は出てこないのですが、よく詠み込むと「大智」も「浄光」も、正信偈の中の言葉なのだと、気づきました。

開入本願大智海 行者正受金剛心

2020年の一月下旬からの県立近代美術館企画展、「1964年」の長岡現代美術館のコーナーで、斎藤義重の言葉がありました。

“各々異なった動きと表情をもつ住人”を表わしたという。’恐らく、浄土ではない、この世、穢土の住人なのでしょう。その住人が希求する浄土の「大智浄光」の四文字の各々について、思いをめぐらしたのかも知れないと思いました。「大智浄光」は、新施設・米百俵プレイスの連結部屋上に展示の予定とのこと。

(2) その二

たまたま駒形十吉さんの年譜を調べていましたら、大光銀行の名称のもと、観音経の一節「廣大智慧観 無垢清浄光」に由来するとの記述を見つけました。『観音経』は法華経のなかの「観世音菩薩普門品第二十五」という一章で、

『観音経』の一部の抜き書き

(20) 真観清浄観 廣大智慧観 悲観及慈観 常願常瞻仰

(21) 無垢清浄光 慧日破諸闇 能伏災風火 普明照世間

曹洞宗經典には、曹洞宗の宗典「修証義」、日常よく使う「般若心経」、
「観音経」などが収められています。

「観音経」は、妙法蓮華経観世音菩薩普門品偈のこと。

駒形十吉さんの年譜より

1935 (昭10) 兄宇多七の死去により、堅正寺支援も継承。

1942 (昭17) 「大光無尽」と社名変更

これより、観音経の一節と大智浄光、そして大光の文字については、堅正寺住職との対話、堅正寺での勤行で知り、さらに現代美術館建設に伴い、前庭の美術作品のテーマに、「大智浄光」を選んだと考え、さらに「大智浄光」の最初と最後の文字として「大光」と考えることもできるのではないかと、思います。大光銀行の名称のもと、大智浄光の話は、小林弘著、大光コレクション(新潟日報社2003),p98にも記載あり。

4. 長岡にあったシュールレアリズムの画家の名作

現代絵画の旗手、斎藤さんの導きもあったと思いますが、世界、そして日本のシュールレアリズムにおけるトップ画家の作品が、かつての長岡現代美術館にありました。シュールリアリストとしても知られていた平澤熊一さんも、美術館に来て、斎藤さんと談笑しながら見たに違いないと思います。



サルバドール・ダリ

「海の皮膚を引きあげる
ヘラクレスが・・・」
～長崎県美術館へ



古賀春江

「月花」
～東京国立近代美術館へ